



英国大学の評価制度：REF を中心に

神戸大学 経済経営研究所
講師 遠藤 貴宏

イントロダクション

もうすぐ REF (Research Excellence Framework) の結果が公表される頃だ。REF とは英国の大学を対象とした競争的資金配分制度である。筆者はいくつかの研究に関わっているが、2014年12月という時期を考慮に入れ、今回は大学をめぐる評価制度に関する研究に触れたい。組織論の研究者にとって大学は興味深い研究対象のひとつである。特に大学をどのように評価するのか、また大学ランキングをはじめとした評価結果が大学の組織的な行動にどのような影響を与えるのか、という点をめぐっては様々な議論が展開されてきた。研究、教育、地域貢献、社会的な啓蒙、内部行政といった様々な組織的課題に直面しているのが大学である。また学術分野によって評価の尺度にはばらつきがある。そういう背景を考慮に入れると、冒頭の REF というのは非常に興味深い。というのも、評価の重点が明らかに「研究」にあり、評価の尺度は分野ごとで調整されているとはいえ、あらゆる学術分野において一斉に実施されるものだからである。

英国においては 1980 年代半ばから 5-6 年おきの間隔で実施されてきた RAE (Research Assessment Exercise) と呼ばれる、REF の前身である競争的資金配分制度がある。RAE は英国大学で行われる研究水準の向上に寄与してきたというポジティブな評価もあり、主要国における高等教育の政策論議においては頻繁に言及され、それを模した制度の導入が行われた国もいくつかある。その一方で、評価の主軸は明らかに「研究」にあり、研究者と社会との接点が軽視されがちであるといったような批判もあった。こうした意見を反映させ、研究成果が社会に与える「インパクト」も評価項目として盛り込んだ REF が RAE の後継として開始された。2014年12月18日にその評価結果の集約と公表がこちらのサイト (www.ref.ac.uk) でもアップされる予定である。

REF の特徴

REF は実際にどのように運用されているのだろうか。REF の提出・評価・結果公表は 36 にわたる学術分野ごとに行われる。したがって、申請書を提出するのは、大学を構成するそれぞれのスクールである。ビジネススクールに関していえば、基本的には 36 ある学術分野の中の「ビジネス・マネジメント」に提出することになる。REF においては、スタッフ一人あたり、期間中 (今回であれば 2008-13 年の間) の学術的なアウトプットを 4 点まで提出することが求められる。前回の RAE に関して、アウトプットの形態としては様々なものがあるが、その中でもジャーナル論文が支配的なものになってきているということがどの学術分野においても指摘されている。今回の REF においてもその傾向が観察されるであろうことが随所で予測されている。

今回の REF2014 の申請に関する提出期限は 2013 年の 11 月末で、結果の発表が今月中旬で

ある。したがって、評価には1年を要するわけだ。これまでのRAEでも今回のREFでも全学術分野に共通するのは、評価項目の重みづけである。今回のREFに関しては、65%が提出されたリサーチアウトプットの評価、20%がリサーチのもたらしたインパクトの評価、残りの15%が研究環境の評価である。

では誰が評価をするのか。各学術分野においてパネルメンバーが選定され、提出されたアウトプットを評価するのである。2008年のRAEに関して、パネルメンバーは提出されたアウトプットの学術的な価値を判断していた。2014年のREFにおいては、上記でも見たように全体の評価の2割がインパクトの評価である。これを評価するために、パネルにはインパクトを評価するアセッサー (Assessors) が追加された。ビジネス・マネジメントに関して言えば、パネルのメンバーが約20人の大学教授、アセッサーは約10人でその大半が実務家である。

むすび

REFの結果は資金配分額に直結するものである。しかしながらREFの含意はそれにとどまらない。他の研究資金への応募においてもREFにおけるランキングというものが、大きな意味を持ってくるのである。すなわち、REFでのランキングを重要な根拠として、「研究拠点」の構築や維持に関する資金の獲得が企図されてきたのである（「少なくともRAEの時代はそうした側面が指摘されており、REFにおいてもそうした側面が予測されている」、というのがより正確な表現である）。そのため、多くの大学で、「REFで勝てる組織作り」が見られる。例えば、REF申請においてシナジーの働きやすいような形でのスクールの再編成や、REFの順位を向上させることのできるような研究者の引き抜きである。特に英国のビジネススクールにおけるスタッフの移動においては、英国内のビジネススクールが加盟するABS (The Association of Business Schools) という団体の発行する学術ジャーナル・ガイドが大きな意味を持つようになっている。¹ここではそれぞれのジャーナルが「レベル別に」4段階に区分けされている。実際のところどの程度これがREFにおける学術アウトプットの評価と連動しているのかという点は更なる調査を待たねばなるまいが、そうであると英国ビジネススクールの関係者の多くには信じられているようである。

REFはインパクトを評価指標に組み込んだといえ、依然として「研究」に主軸を置く評価制度である。こうした評価制度がどのように研究内容そのものに影響を与えてきたのか、また大学の抱える他の組織的課題についてはどういった作用を及ぼしてきたのかという点について、引き続き調査を進めていく予定である。

REFの概要に関しては、次のような文献がより詳細な検討を行っているので、もしもご興味があれば参照されたい。

- Adams, J., & Gurney, K. A. (2014). Evidence for excellence: has the signal overtaken the substance? An analysis of journal articles submitted to RAE2008. London, UK: Digital Science.
- Sato, I., & Endo, T. (近刊) From the RAE-able to the REF-able? A Note on Formative Reactivity in National Research Quality Assessment, 『大学評価・学位研究』.

¹ http://www.associationofbusinessschools.org/sites/default/files/absversion4_excel_24.3.10.pdf

このリストはREFの結果が出てから改訂されることが予定されている。